

# 幕末思想と農業技術をめぐる言説

桂島宣弘

幕末の諸思想、ことに農民と関係の深い思想が、いずれも農業技術をめぐる言説を伴っていることは、しばしば指摘されてきた。しかしながら、そうした農業技術をめぐる言説の構造から、逆にそれらの諸思想の性格を考えてみることは、あまりなかったと言ってよい。ここでは、平田派国学のそれと、民衆宗教特に金光教の場合について簡単に考察を加えてみることで、従来あまり照射されてこなかった農業技術をめぐる言説から見た幕末思想について問題提起を試みてみたい。

## 平田派国学と農書

平田派国学者の門人は、周知のように過半は村落指導者などの豪農層であり、それらの豪農たちは、盛んに農書を著し、また平田篤胤自身がそれに対して序文を寄せ、ときには気吹舎からその発刊を行うなどの援助を行っている。宮負定雄『農業要集』、『草木撰種録』、小西篤好『農業余話』、田村吉茂『農業自得』等がよく知られた事例である。ここでは、宮負定雄のケースによって、その特質について簡単に見ておきたい。『農業要集』は、「農業全書に漏たる事と、己年来種芸を勤めて自得したる事の、彼の書の説と異なる業を載」せたもので、特に品種の良種選別が力説されている。その中でも強調されているのは草木雌雄説であり、『草木撰種録』はそれを三十二種の作物について図示したものであった。この草木雌雄説は、陰陽論を作物の形態に当てはめ、雌雄に留意して撰種するならば増収が得られるとするもので、後には大蔵永常によって否定された説であるが、宮負が少なくとも現実には農業生産力の増大を計り「富足」を蓄積しなければ、この時期の「荒村状況」の克服が困難と考えていたことは間違いない。無論、しばしば指摘されるように、宮負の主張の根幹は『民家要術』、『国益本論』で展開されているような「幽冥」論・「産霊」論に基づく農民の「教道」にあったことは否定し得ないが、ここで力説されている「間引き」禁止論も、農業生産力の増大と結びつけられているのであって、単なる精神主義的農村秩序論が述べられているわけではないことは、やはり留意されてよいであろう。

ところで、宮負はこの草木雌雄説に基づいて、「穂の本枝一なる八男二なる八女」とし、稲の女種を植えれば増収が得られると説くが、問題はその説がいかにか自覚的には「真知実見」して「自得」したものであったとしても、実は平田篤胤の「産霊」論から演繹されたものであり、そこに幕末国学者の農業技術をめぐる言説の特有の性格が存在しているということである。つまり、「五穀の種を蒔も夫婦交合と全く同理」と述べられているような、陰陽＝男女の「産霊神」によって万物が生成されているとする世界像が、こうした一見経験的な説の根底に存在していることに注意しなければならない。ここにわれわれ

は、新たな世界像・神観念から人間・農業を説き起こす平田派の農業技術をめぐる言説の構造を典型的に見ることができる。この構造は、後に宮負の草木雌雄説について批判的に言及し、「万物化育の神理」について強調している佐藤信淵の『草木六部耕種法』になると、更に一段と明瞭になってくる。無論、信淵には宮負のような実際の経験が存在していたかどうかはなはだ疑わしいと言わねばならないが、宮負のそれと信淵のそれは、「産霊神」の「化育」についての篤胤の説くところに依拠してこそ、技術が技術として確信される構造という点では共通したものと見てよいだろう。

だが、農業技術論として説かれ受容されたこれらの言説は、それ故にこそやはり「破綻」を免れなかったことも事実であった。確かに、明治初年の民部省勸農局等での信淵の「農書」の影響力は大きなものがあつたようだ。だが、結局は技術論としての影響は後退し、『鑄造化育論』の主張、更には「大陸計略」論に代表される信淵像が定着していくことになるのは周知のとおりである。また、宮負についても、晩年は神仙界、「靈石」や「神仙靈薬」への関心を強め、故郷では「狂人」扱いされたと伝えられ、下総でも平田門に代わって大原幽学門が浸透していくことになる。ここには、農業技術論としての側面での平田派の言説の帰趨が、明確に示唆されていると言わなければならない。

## 金光教の農業技術論

備中国大谷村の農民であり、後に金光教祖となる赤沢文治が、伝承的金神信仰から新たな金光教という信仰へ進んでいった契機は、自ら、及びその周辺で生じた「病氣」や死＝「金神七殺」であった。しかしながら、それは無論自らの「百姓成り立ち」の問題として深刻な問題を「病氣」が提起するものであつたからであり、したがって正確には、やはり農業経営をめぐる危機感が底流にあつたと見てよいだろう。文治が新たな信仰を発見する中で、立ち現れた神の最初の「働き」＝指示が、専ら農作業に関わるものであつたことは、この意味では当然であつた。今、文治の信仰回顧録である『金光大神覚』から、その辺りの記事をひろってみると、「油入れな。……秋うんかも食わんと思え」「新唐うすじゃけに重いから神がてごしてやるぞ」「きょうこのまわりの稲、刈り干しにいたせい」「きょうは牛追うて帰れ。ばんに使われん、降りじゃ」「その田その田へのお知らせください。田植えしつけ、肥のこと。麦打ちつえかうこと。当年は雨多いし、田麦中つえだけ、へりをかうな」「綿肥、反にまこのせんとく一俵あてにいたし、やけても水あてな」等々と枚挙に暇がない。農業技術論として見た場合、これらがどの程度の効果があるものなのか、素人のわたくしには判断がつかないが、少なくとも周辺農民とは明らかに異なつた作業が文治に金神から指示され、文治自身が確信を持ってそれを実践して成果を挙げたことだけは『覚』から窺える。そして、こうした金神と文治の言わば共同作業としての農作業こそが、文治の信仰鍛練の場であり、信仰の深化過程であつたことも間違いのないだろう。

う。 信仰の一つの集約として述べられた慶応三（一八六七）年の記事として「病気あつては家業できがたなし。身上安全願ひ、家業出精・五穀成就・牛馬にいたるまで、氏子身上のこと、なんなりとも実意をもって願え」とあるのも、「家業」= 農業成就こそが、第一の信仰の立脚点であったことを示している。そして、文治の元に集まってきた初期の金光教信者（「直信」）の圧倒的多数がやはり農民であったことは、その信心の動機が「病気直し」にあったとしても、「病気」が農業と密接に関わるものであればこそ「難儀」として実感されていたことを物語っており、事実、信者と文治の言説を集めた『金光大神言行録』にも、農業をめぐるやりとりが散見される。

文治やその「直信」たちの信仰は、見方を変えれば、自らの経験で得た「病気直し」や農業技術を、神と関わらせることで確信を持って語りだし実践していくものと捉えられる。そこには文字通りの農民の経験が集約されており、『覚』を農書ではないとしても、農作業日誌として読むことは少なくとも可能である。そして、例えば秋うんか対策として油を入れないこととか、綿肥として油粕を入れた後は日照りにあっても水を入れないといった具体的経験が、神の言説として存在することで裏打ちされ、確信へと高められていっているのである。

ところで、金光教は明治以降には初代白神新一郎や佐藤範雄によって、主として大阪などの都市部で爆発的に教線を伸ばしていくことになる。そこでの布教対象は、つい先頃まで農村で生活をしていた、しかし今や都市民となった「難儀」に喘ぐ人々であった。元来農民の宗教であった金光教は、したがって当初はまだその農民性を色濃く纏っていたとしても、なお有効性を保持し得ていたであろうが、やがて都市型の教説へと転換を余儀なくされるようになる。金光教の教義が変容していく背景には、国家神道体制や「文明開化」の問題以外に、こうした問題が横たわっていたことも看過されてはならないだろう。

おわりに

以上の幕末国学と民衆宗教の事例は、いずれも幕末期の農業技術をめぐる問題が、宗教的言説として展開されていったことを示すものと言える。しかしながら、両者の間には重要な構造の相違が見られることも間違いない。今のところ、前者を演繹的構造のもの、後者を帰納的構造のものと分類しておくが、近世前期の気の哲学からする農業技術論との関連も含めて今後の検討を要する問題としなければならない。近代において両者が辿った軌跡について、こうした問題と関連づけるならば、恐らくこれまでとは異なった像が浮かび上がることについても簡単に示唆しておいたが、これも今後の進展の望まれる研究領域であると思われる。